

これは“不登校・ひきこもり”時代への回答である

[記録映画]

MY PACE

自分らしく生きるとは？
世間の「普通」じゃなくてもいいとは？

MY SPACE

マイペース マイスペース

ひきこもりソーシャルワーク

[ドキュメンタリー／2025年／58分]

監督・編集 古賀陽一 プロデューサー 中橋真紀人

【出演】創 HAJIME Cafe の皆さん、山本耕平(社会社法人 一麦会理事長)、岸本周平(前・和歌山県知事)

2026

10
3 sat.

札幌市教育文化会館 4階講堂 (札幌市中央区北1条西13丁目)

- ① 10:30～11:30 トーク 11:30～12:00
 - ② 13:00～14:00 トーク 14:00～14:30
 - ③ 15:30～16:30 トーク 16:30～17:00
 - ④ 18:00～19:00 トーク 19:00～19:30
- 各回終了後、中橋真紀人プロデューサー他のトークあり。

料金＝前売・予約1000円／当日1300円／全障研・映サ会員800円／障害者・学生800円
満席の場合は当日券を販売しません。

前売券販売プレイガイド＝道新／札幌市民交流プラザ／札幌市教育文化会館

問い合わせ＝予約・電話 080-1892-3299(奥田)／メール sapporokinema@yahoo.co.jp



当日支払いで便利なQRコード・メール・電話予約受付中(前売料金)

主催：札幌映画サークル 共催：全国障害者問題研究会北海道支部

後援：札幌市 協力：きょうされん北海道支部

協賛：焼鳥じゃんぼ／札幌市中央区南5条西4丁目(中小路東向き) 電話 011-531-6451

【作品介绍】

開設して10年。古民家カフェ「創 HAJIME Cafe」では、ひきこもりだったメンバーたちが、仕込みや調理、配膳、接客を手分けして行なっている。スタッフたちはカフェの運営と並行して、困難を抱える当事者や家族の相談に応じている。ゆっくりした時間が流れ、ホッとひと息つける「居場所」で、メンバーたちは自己を見つめ直す。



解説：記録映画

マイペース マイスペース

ひきこもりソーシャルワーク



内閣府の2023年の報告によれば、全国のひきこもり者は推計で146万人に上る。2025年に報告された2024年度の小・中・高の不登校児童生徒も過去最高の42万人超となった。校内教育支援センターなど別室を利用する児童生徒やうつ状態などで病休にカウントされる実質的な不登校を加えて「不登校100万人時代を迎えている」と説く向きもある。記録映画「マイペース マイスペース ～ひきこもりソーシャルワーク」(監督／古賀陽一：58分)は、こうした状況への一つの実践的な回答として光彩を放つ。

本作は、中橋真紀人プロデューサーが、長年、交流を続けてきた和歌山の社会福祉法人一麦会「麦の郷」の施設の一つである古民家カフェ「創 HAJIME Cafe」(紀の川市)を舞台としている。ちなみに「麦の郷」は2025年6月14日に世界したジェームス三木の脚本による富永憲治監督作品「ふるさとをください」のモデルかつロケ地である。

「創 HAJIME Cafe」は、和歌山駅から電車で30分の粉河駅前にある。大正時代の実業家の100年超えの古民家を20年ほど前に譲り受けた時から再生と活用が図られ、十数年前にカフェを設けることで、「メンバー」と呼ばれるひきこもり経験のある人たちの、次のステップに向かうための“居場所”かつ“労働の場”となった。

監督の古賀陽一は、『こんばんは』の編集を担当して見事な手腕を見せ、記録映画『夜明け前 呉秀三と無名の精神障害者の100年』(監督／今井友樹)でも巧みな映像構成を担った。中橋が古賀を半ば無理やり、粉河にある「創カフェ」に引き連れて、取材・撮影を始めたのは2023年のことだった。何をどのように明らかにするのかというコンセプトも漠然としたままの突入だったが、その後1年半のメンバーやスタッフとの何気ない交流とやりとりから、古賀の胸中に、作品の軸となるものが湧き上がり、助成を受けた文化庁芸術文化振興基金への納品期限の数日前の2025年3月末に完成した。本作は、韓国や台湾でも上映される予定であり、字幕入れの作業が進められている。

*作中登場の岸本周平和和歌山県知事は2025年4月に急逝。知事就任後に「和歌山にも夜間中学を作る」と約束し、実現させた人であった。

ここには“不登校・ひきこもり”を考えるヒントがある。
問われているのは、社会やわたしたちの“眼差し”のあり方だ。

(田中敦：特定非営利活動法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク理事長)

さっぽろひかり福祉会の労働現場から自然に生まれた
「あいさつ・雑談・ほうれんそう やめませんか」という問いに
応えるかのような世界が広がっていた。

(高井賢二：社会福祉法人さっぽろひかり福祉会「第2ひかり工房」施設長)

*「ほうれんそう」とは「報告・連絡・相談」の頭文字を取ったビジネス用語。

私も含め多くの当事者は望んでひきこもり状態になるわけではない。
「どこに行っても迷惑をかける」「申し訳ない」というメンバーの語りに共感した。

(大橋伸和：不登校・ひきこもり経験者)

●アフタートーク登壇者

(登壇回は末尾に番号で明示)

■中橋真紀人(なかはし まきと)：本作プロデューサー。アニメ「どんぐりの家」(1997年/第1回文化庁メディア芸術祭優秀賞受賞)、夜間中学で学ぶ人々の長編ドキュメンタリー「こんばんは」(2002年/文化庁映画大賞)、車椅子バスケットボールの青春を描く「ウィニング・パス」(2003年)、精神障害者の社会復帰を描く「ふるさとをください」、「夜明け前 呉秀三と無名の精神障害者の100年」(2018年)を製作。2019年に内閣府の「バリアフリー・ユニバーサルデザイン功労者」優秀賞受賞。一般社団法人障害者映像文化研究所常務理事。①②③④

■二通諭(につう さとし)：本作アドバイザー。札幌映画サークル運営委員、札幌学院大学名誉教授、社会福祉法人さっぽろひかり福祉会理事長、公益財団法人ふきのとう文庫代表理事代行、障害者映像文化研究所顧問。医学書院『総合リハビリテーション』1996年11月号から「映画に見るリハビリテーション」連載中(累計本数29年350本)。①②③④

■田中敦(たなか あつし)：不登校やひきこもり経験者として1999年に、特定非営利活動法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワークを設立。地方紙47社と日本放送協会共同通信社主催による第14回地域再生大賞「つながる、多様性が拓く」で「優秀賞」を受賞(2024年)。社会福祉法人札幌全育会理事、大学非常勤講師。①

■高井賢二(たかい けんじ)：社会福祉士。触法知的障害者入所更生施設、通勤寮等の勤務を経て、北海道農業に憧れ1992年社警町に移住。自閉症の青年たちを雇用する農場にて10年間共働。さっぽろひかり福祉会「第2ひかり工房」施設長として、「コミュニケーション力」信仰から脱する働き方を提唱。②

■大橋伸和(おおはし のぶかず)：小学4年生で発症した場面緘黙症は13年に及び、その間、不登校・ひきこもりを経験。札幌市集団型支援拠点「よりどころ」、レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク等で、ひきこもり等の支援実践を積み、さっぽろひかり福祉会でピア・サポーターとして相談業務を担う。③